

## 被災地のフェーズ変化に対応した遠隔地からの中長期的支援

—山形から石巻への支援を行う大学生の団体「START Tohoku」を事例として—

川口 幸大・菊池 遼・関 美菜子

### はじめに

本稿は、東日本大震災の被災地に対して遠隔地からの支援を行うボランティア団体に着目し、活動開始から今日までの実態を民族誌的に記述すること、およびその成果と問題点についての考察を通して、将来起こりうる大規模災害に際しての遠隔地支援の課題と可能性を提示することを目的とする。

日本で災害時におけるボランティアの認知度が高まったのは、1995年の阪神・淡路大震災を契機としてのことであろう（山下2008：34）。阪神・淡路大震災では、1年間で約138万人ものボランティアが活動した（兵庫県2006）。2004年の中越地震や2007年の中越沖地震の際にも同様に多数の人がボランティア活動に従事した。

2011年3月11日に発生した東日本大震災においても、数多くの災害ボランティアが被災地で活動した。とりわけ大きな被害を受けた岩手・宮城・福島の3県で災害ボランティアセンターを経由して活動した人の数は、震災発生後から2013年9月現在までで、延べ129万5300人にのぼる（全国社会福祉協議会・全国ボランティア・市民活動振興センター2013）。ボランティアセンターを経由していない人や3県以外で活動した人も含めると、この数はさらに大きなものになる。

災害ボランティアの活動内容は、被災地が復旧から復興へと向かうにつれて変化していく。その時系列的なフェーズ変化は、ライフラインの復旧や避難所等の設置・運営などの「復旧段階」と、仮設住宅あるいは復興住宅への入居に始まる中長期的な生活再建といった「復興段階」の二つに分けることができる（菅2008：63）。これら二つの段階は時期的に重複することも多く、明確に線引きできるものではないが、本論では便宜上、前者に関わるボランティアを「復旧ボランティア」、後者に関わるものを「復興ボランティア」と呼ぶことにする。こうした現地のフェーズ・ニーズに応じた活動をするボランティアについては、主に被災地に拠点を置くものに着目して、これまでも多くの研究や報告が行われてきた（山下・菅2002、松井2011、稲垣2008、中原2011）。復旧ボランティアは、災害によって破壊された既存の社会システムの代替・補完に大きな役割を果たしてきたが、その分、支援する側にも多大な負担がかかることもあると指摘されている（菅2002：125-126）。復興段階においては、現地のニーズの減少に伴ってボランティア活動は徐々に縮小し、その活動内容は被災者が自らの生活を再構築していくための援助や、地域資源を活かした活動などへとシフトしていく（菅2008a：63-64）。いずれにおいても、様々な関係者との協力関係や資金の確保は活動を行う上で重要な要素である（菅2002、2008b）。

一方で、災害の被害を直接受けた地域以外に拠点を置く、遠隔地からの災害ボランティアに関する研究は比較的少ない。一例として、東日本大震災の発生後に岩手県の内陸部に位置する遠野市に設置されたボランティア団体「遠野まごころネット」を対象にしたものがあり、遠隔地を拠点とする団体の課題として、立地の選択や活動資金の調達、あるいは被災地内外の支援組織との連携の難しさなどが指摘されている（天野・中村2012）。ただし、この研究は主に震災発生から間もない時期の支援に焦点を当てたもので、そこから1年以上経過した後の活動内容や構成メンバーたちの変化についてはうかがい知ることができない。言い換えると、遠隔地からのボランティアについて、復旧から復興までの長期に渡る活動に焦点を当てた研究はこれまでのところほぼないと言ってよい状況なのである。しかしながら実際には、東日本大震災の発生から3年近くが経つ現在でも、数多くのボランティア団体が遠隔地から被災地支援を行っている。

本稿では、そうしたボランティア団体の一つ「START Tohoku」（以下、START）に着目する。STARTは山形県山形市を拠点として2011年の11月に発足し、宮城県沿岸部に位置する石巻市に定期的に通いながらボランティアを行っている（山形市から石巻市までの距離は約120キロ、車で片道2時間程度を要する）。メンバーは主に山形大学と東北芸術工科大学の大学生であり、2013年12月現在も活動を続けている。

以下、STARTの発足から今日に至るまでの活動の推移を時系列的に詳しく記述してゆく。そして、そこに生じた様々な問題や葛藤を明らかにしながら、将来起こりうる大規模災害に備えて、遠隔地からの長期的な災害ボランティアについてのケース・スタディを提供したい。

なお、本稿執筆者の一人である菊池は、震災発生当時、山形大学人文学部の2年生（現在は東北大学大学院経済学研究科に所属）で、2011年9月からメンバーとしてSTARTの活動に携わっている。関は震災発生当時、東北大学文学部の2年生（2013年9月に卒業）で、2011年冬からSTARTの活動の一つであるスタディツアーに参加者の立場として関わりつつ参与観察を行ってきた。本稿の事例部分は主としてこの二人のフィールドワークに基づいている。

## 1. 東日本大震災の発生とSTARTの立ち上げ

### （1）ボランティア団体「START Tohoku」の発足

STARTが誕生するきっかけとなったのは、震災発生直後の2011年5月から山形大学と東北芸術工科大学が共同で運営していた災害ボランティア団体「スマイルエンジン山形（以下、スマイルエンジン）」である<sup>(1)</sup>。スマイルエンジンは毎週土曜日に大型バスを運行し、山形市在住の人々を中心に毎回20人から40人のボランティアを被災地へ送るといった活動を行っていた。主に石巻市をはじめとする東北沿岸部を対象地域として、津波によって発生した瓦礫の撤去や側溝の泥かきなどの災害ボランティアに従事した。

START立ち上げの中心人物がKさんである。震災発生当時、Kさんは山形大学の研究生で、美術教育を専攻していた。従来から作品を通して社会に対する問題提起をしていたが、震災発生後には美術で何かを表現するよりも、実践的に社会に対して行動を起こしていくべきだと考える

ようになったという。スマイルエンジンで活動するようになったKさんは、ボランティアを通してまちが綺麗になったとしても、働くことができなければそこに住み続けることはできないと考えるようになり、「復旧」の次の段階である「復興」に目を向け始めたという。東日本大震災による被害の大きさを考えると、復興には長期間を要することが予想されるため、ボランティアにたずさわる学生自身も長期的な視点に立った支援を考えなければならない。よって、学生自らが大学で学ぶ専門知識を実践で活かす場となる、学生シンクタンクが必要であると確信したという。これは震災発生から約1ヶ月半後の2011年4月末のことである。こうしてKさんが設立したのがSTARTである。

KさんはまずSTARTの活動に必要な資金を得るため、山形大学が公募していた平成23年(2012年)度「やまがた元気プロジェクト」に応募し、その年の7月末に採択が決定した<sup>(2)</sup>。助成金として30万円が支給され、資金面での裏付けができた。しかし、このKさんの動きに対して、スマイルエンジンのメンバー内では反対の声もあった。泥かきなど「復旧」段階のボランティアの需要が残る中で他の問題に取り組むことには賛同しかねるというメンバーがいたのである。しかし最終的には、次のフェーズに即した支援が必要だというKさんの信念のもと、STARTはスマイルエンジンとは別団体というかたちで、2011年11月に発足することになったのだった<sup>(3)</sup>。

## (2) 活動の開始 —石巻でのワークショップ開催—

2011年9月2日、KさんはSTARTの活動を本格的に始める前に、スマイルエンジンの顧問でありマーケティングを専門とする山形大学のH教授(当時)と大学生数名を集め、STARTによる活動の構想を以下のように説明した。

従来(震災前)は東京から講師を呼び、地方の人々が知識やスキルを得るというかたちが多かったが、これからは「東北から共に学び発信する」をテーマに、東北の現状を東北の学生から講師に対して伝えたい。それを元に情報発信やプロジェクト発足を実現させたい。

その後、H教授の提案によって、スマイルエンジンの立ち上げにも関わっていた経営コンサルタントのR氏を招き、「経済」をテーマに第1回のワークショップを開催することにした。R氏は東京でコンサルタント業の傍ら、ビジネス関連の著書を執筆するという実績を持ち、NPO活動にも積極的な人物である。数週間後、KさんがH教授とともにR氏と直接会い、STARTの構想を伝えたところ、R氏からは「学ぶだけでは実質的に被災者のためにならない。座学よりも実際の現場での経験がいちばん貴重で、かつ様々な経験やスキルが身に付く」との意見を受けた。このときの議論の結果、当初の学生シンクタンク構想を改め、STARTの設立主旨として、R氏と学生が被災地の企業や商店主とともに商品開発から販売までを通した経済復興支援を行うとした。またこれに加えて、11月3・4日に石巻においてR氏による経済復興ワークショップを開催することを決めた。石巻はスマイルエンジンで頻繁に訪れていた場所なので、Kさんや他のメン

バーにとっても馴染みがあり、またボランティア活動を通して知り合った被災地の人たちが自分たちを受け入れてくれるのではないかと考えたのである。

ワークショップにあたっては、石巻の企業や商店主に人脈のある人たちの協力をあおぐ必要があった。震災の発生以降、様々な人々が被災地を訪れており、なかには現地の人たちとトラブルを起こしているケースも報告されていたからである。Kさんはインターネットや自らのネットワークを活かして情報を収集するなかで、青山学院大学のボランティアステーションが石巻の商店街でボランティアをしていたことを知った。その顧問のT教授（当時）は海外支援や災害ボランティア・危機管理の専門家であり、Kさんが連絡をとったところ、STARTの活動への協力を快諾してくれた<sup>(4)</sup>。

このように準備を進め、STARTにとって初めての対外的な活動となるワークショップを迎えた。参加したのは、Kさんを含めたSTARTの学生メンバー6名、R氏ら社会人2名、そしてH教授である。一行はまず石巻の商店街にある呉服店を訪れた。店主のOさんは、写真を見せながら震災が起きた当時の様子を説明してくれた後、以下のように語った。

反物も被災しちゃってね。とっても高価なんだよ。なかには私の好きな柄もあるから捨てるに捨てられなくてね。津波で汚れちゃって、洗ったりもしたんだけど、シミは取れなくて。もう商品価値もなくなってるし、捨てちゃおうかと思ってるんだけど……。

反物を実際に見せてもらったところ、非常に美しい生地ではあったが、確かに所々にヘドロの跡が残っていた。呉服店を出た後、メンバーたちからは真っ先に反物のことが話題に上り、再利用して復興グッズをつくることはできないだろうかという意見が出た。とりわけ、メンバーの一人、東北芸術工科大学プロダクトデザイン学科のCさんが積極的な姿勢を見せていた。



写真1 Oさんの店で汚れた反物を見せてもらっているSTARTのメンバー

また、商店街では、紳士服店を営むD氏とも話す機会があった。このときD氏は以下のように語った。

私はね、津波なんて来ないと思って逃げることもしなかったのよ。チリ地震の津波のときも大したのじゃなかったから、今回もそうだと思ってたのよ。それで、津波が来るちょっと前に、店の外に出てたのね。そしたら、あの十字路の角から黒い水が押し寄せてきてね。私はそれ見て、急いで店の2階に登って何とか助かったのよ。登りきったところに後ろを振り向いてみると、すぐ後ろに津波が来ててね……。あのときたまたま店の外に出てたから津波に気付いて逃げられたけど、もし店の中にいたら気付かずに逃げ遅れて、私は亡くなってたかもしれないね。

STARTのメンバーにとって、マスメディアを通したのではなく、被災者から実際に被災体験を聞くのは初めてのことであった。後のミーティングでは、このように被災者の話を直接的に聞くのは非常に重みがあり、さらに防災の観点からも貴重な意義があるという意見が出された。また、前述した青山学院大のT教授と学生たちがボランティアをしていたのが実はD氏の店がある商店街だということが分かり、STARTのメンバーとD氏との間には親近感が生まれた。

次に、仮設住宅で支援活動をしているボランティア団体の代表・Mさんの話を聞いた。Mさんはもともと東京でフリーランスの仕事をしていたが、震災発生後に石巻の仮設住宅を中心に支援活動を始めたという。そのMさんから、仮設住宅の女性たちがつくる食事がおいしいので、それを事業化できないかと考えているという構想を聞いた。これに関してSTARTのメンバーからは、経済復興のきっかけとしての可能性があるのではないかという意見が出た。

2日目は、市内の日和山に登った。テレビなどで頻繁に報じられたように、震災の発生当初、日和山には多くの周辺住民が避難してきた。山頂からは石巻で最も被害の大きかった地域のひとつ、門脇地区を一望することができる。ふいに、年配の男性がメンバーに話しかけてきた。聞くと、彼の妻は津波で流されてまだ見つかっておらず、彼はそれ以来、何もやる気が起きないのだという。メンバーはこの話を聞き、実際に話してみなければそういった境遇にある人の実情は分からないとの思いを強くした。この男性の話やD氏との出会いが後に、被災者に自らの体験や思いを語ってもらう「語り部」ツアーに結びつくことになる。

日和山を降り、門脇小学校と石巻漁港を訪れた後は、場所を仙台に移して2日間の行程を振り返りながら経済復興の案を考えた。そこではR氏の指示のもと、各自が2日間の見聞を踏まえて石巻の問題点とその解決策を付箋紙に書き出していった。問題点はいくつも思いつくが、解決策については書きあぐねるメンバーが多かった。R氏は「例えば…」と言ってペンを手にし、「石巻の人と結婚して、定住する」などの例を挙げてみせた。それに習って学生のメンバーたちも、「SNSを使って情報発信をする」、「石ノ森章太郎のキャラクターを使ったグッズ展開をしていく」、「反物を利用した商品をつくる」など、次々とアイデアを出しあった。時間の都合上、解決策をより具体化させるための議論には至らなかったが、R氏によるワークショップはこうして終了した。

### (3) 復興プランの策定

このワークショップの後、STARTのメンバーは計6回のミーティングと石巻への再度の訪問を通して復興プランを練っていった。結果として、以下の三つの復興プランが完成した。

一つ目は「石巻まち歩きスタディツアー」である。STARTのメンバーは、前回のワークショップの際にD氏が語ってくれたような被災体験を後世にも伝承していくべきだとの認識に至った。しかし、訪問者が被災者と直接話すのは難しい。そこでD氏を語り部として、石巻の市街地を歩きながら震災当時の状況を話してもらい、そして語り部には謝礼を払うという案が出たのである。

二つ目は「反物のリメイク商品」である。これは呉服店のOさんが見せてくれた、津波による汚れのついた反物に着想した企画である。Oさんの店を訪れた後に、メンバーから反物の活用案が出たのは上述の通りである。その後、企画を練ってゆく中で、メンバーは東北に「裂き織り」という技術があることを知った。これは、破れた衣類を裂いて糸にし、それをもう一度編み直すという、いわばリサイクル活用である。地元根付いていた技術を復興に活かそうというアイデアが反物リメイクの企画に結実したわけである。具体的には、反物からエコバッグ、Tシャツ、お守り、シュシュ等の商品を作る、その作業は仮設住宅に住む被災者に行ってもらい、売上金はOさんと制作者に還元する、というものである。

三つ目は「復興ステーション計画」である。実際の訪問を通して、メンバーは商店街の活性化と震災の伝承を目的とした施設の必要性を認識した。まずは商店街に人を呼び込むのが重要であるから、石巻駅前商店街の観光地マップの作製、メッセージボードの設置、植樹等を行うというアイデアが出た。また、語り部が常駐して石巻を訪れた人々に街を案内するという案もあった。

STARTはこの三つの案を「復興プラン」として、11月22日に商店街の人たちに提案することにした。結論から言うと、どの案もおおむね肯定的に受け止められた。ただ、商店街の人たちからは、プランの遂行にあたっては学生メンバーよりも、経営コンサルタントのR氏およびT教授とH教授が中心になってもらいたい旨の意向が示された。これに対して学生メンバーは、自分たちがまだまだ信頼されてはいないと落胆したが、ならば信頼を得られるように今後より努力してゆこうと前向きにとらえることにした。

また青山学院大のT教授との話し合いによって、今後はSTARTと青山学院大学とが協力体制をとることに決定した。具体的には、山形のチームは石巻に通いながらスタディツアーの計画と復興グッズの企画開発を行い、一方で青学のチームは東京でのマーケティングを通してツアー参加者の募集や復興グッズの販売を担うことにしたのである。

こうしてSTARTが提案した三つの復興プランは実行に向けて動き出すことになった。以下に、それぞれのプランについて、開始から現在までを時系列的に詳述してゆく。

#### (4) 復興プランの実施

##### ①石巻まち歩きスタディツアー

STARTは復興プランの一つ目、すなわち「石巻まち歩きスタディツアー」の実施に向けて、まずは2011年12月18日にモニターツアーを開催することにした。それに先立つ12月4日にSTARTのメンバーが現地を訪れ、語り部になってもらうD氏にも参加を依頼して本番さながらのリハーサルを行った。それに基づいて、表1に示した通りの具体的なプログラムを策定した。

表1 モニターツアーの行程表

8:00	山形出発
10:00	日和山到着
10:30	日本製紙工場、門脇小学校、日和大橋、石巻漁港
11:30	仮設住宅で昼食
13:00	石巻まちあるき
15:00	ディスカッション
16:00	自由散策時間
16:30	石巻出発
18:30	山形到着

モニターツアーでは、STARTのメンバーと、その知り合いを中心とした計19名の参加者が実際に石巻を訪問した。結果として、次のようないくつかの課題が明らかになった。

一つ目はSTARTのメンバーの知識不足である。ツアーで立ち寄る各ポイントではメンバーが説明を行ったが、参加者からの様々な質問に対して十分に答えられない場面が目立った。二つ目は昼食時間が大幅に超過してしまったことである。これは仮設住宅の女性に料理を提供してもらうという、以前のワークショップの際に出た提案を受けての企画であった。しかしモニターツアーの本番では、料理の準備に予想以上の時間がかかったため、ツアーの進行に遅れが生じたのだ。前述した仮設住宅の支援団体の代表であるMさんは、「料理は楽しくやってもらいたいから、強く言えないのよ」と胸の内を明かした。確かにそれはもっともなことであり、これについてはSTARTも彼女たちを責めることはできなかった。三つ目は、ツアー最大の目玉であるまちあるきに関することであった。語り部のD氏に屋外で話してもらうと、20名近い参加者には聞き取りづらかったのである。

こうした課題はあったものの、参加者からは一定の評価を得られ、アンケートでも肯定的な回答が多かった。とりわけ、「知人・友人にもスタディツアーを勧めたいか？」との問いには全員から「イエス」との回答が得られたことによって、メンバーはツアーを実行してゆく意義を確信した。さらにこのモニターツアーに参加してもらった青山学院大学のT教授との間で、同大学のボランティアステーションとSTARTとの協働、および翌年2月12日に青山学院大学の学生を対象としたツアーの実施を決めることができた。

青山学院大学の学生を主たる参加者としたそのツアーには39名が集まった。ツアーに参加した理由を聞くと、「ボランティアをした石巻のその後を知りたかった」、「復旧系のボランティアは危険であると親の反対にあったが、今回は了解が得られた」、「被災地を見てみたいと思った」など様々であった。STARTとしてはモニターツアーの際に出た課題に対してはできる限りの対策をとったつもりだったが、今回も問題の根本的な解決には至らなかった。またしても昼食時間が超過し、まちあるきで語り部の話が聞き取りにくいという同様の問題が出てしまったのである。また、特に青山学院大学のボランティアステーションに所属する学生たちからは、「話が分かりにくかった」、「なぜその場所を訪問するのが分からなかった」等、厳しい意見が出された。こうした課題を克服し、ツアーをビジネスとしての軌道に乗せるために、青山学院大学の学生と4月に合宿を行うことを決めた。この合宿については後述する。

## ②反物リメイク商品

「反物リメイク商品」の企画について、呉服店のOさんからは「どうせ捨てるものだったから、ぜひやってみてほしい」との了解を得た。前述したように、企画に特に前向きだった東北芸術工科大学プロダクトデザイン学科のCさんが中心となってプロジェクトを進めることに決まった。

まずは2011年12月中旬に試作品を制作してみることを目標にした。12月中旬に裂き織り用の織り機が到着し、2012年1月初旬には最初の試作品であるバッグが完成した。しかしこのバックについては、仮設ボランティア・リーダーのMさんから、「仮設住宅のお母さんが作るにはちょっと難しいんじゃないか。どうせだったら最初は小物にしたら」との意見が出されたため、他の商品を考案することにした。これを受けて改めて企画を練り直した結果、チアリーディングで使う「ポンポン」をイメージしたアクセサリーを試作してみた。石巻を応援しようという意味を込めて、名称を「Saki-pon」とした。「Saki」は、「裂き織り」と「もう一度花が咲きますように」という願いをかけたもの、「pon」は「ポンポン」を表している。このSaki-ponはOさんら呉服店の人たちには好評だったが、Mさんからは「商品としてクオリティが低すぎる」と言われ、また現地の人からも500円という値段設定に対して「こんなものに500円を出して買わないよ」と芳しくない評価を受けた。STARTとしては、Mさんの団体と協力してSaki-ponの生産を想定していたが、それは難しくなってしまった。

だが一方でSaki-ponは、H教授の知人が翌年2月から仙台メディアテーク内のミュージアムショップで販売させてくれることになっていたために、早急に量産体制を確立しなければならなかった。また、この企画を進めていたCさんは当時学部4年生であり、翌年の春からは東京の企業に就職することが決まっていたために、なんとしても3月までにプロジェクトを形にしたいと考えていた。そこで、青山学院大学のチームにもSaki-ponの生産面での協力を依頼したのだが、「Saki-ponは被災者が作る場所に意味があるので、青学生が作るのはいかがか」という異論が出された。これに対してCさんとH教授は、まずは商品を売り出して実績を作ることが必要との意見で一致したのだが、結局のところ3月中に生産体制を築くことはできず、Saki-ponの販売は先

送りになってしまった。ただ、青山学院大学からの協力は得られることになり、2012年4月からはプロジェクトの拠点を東京に置いて、Cさんも引き続き関わりながら、この企画を進行させた。



写真2 完成した「Saki-pon」

### ③復興ステーション計画

「復興ステーション計画」については、T教授が助成金を獲得し、震災発生から1年後の2012年3月11日までにオープンするという計画でまとまっていた。しかし、その助成金を出している団体が復興ステーションへの資金の使用に難色を示したため、このプロジェクトは半ばで断念を余儀なくされた。

## 2. 復興期のボランティア—震災発生から1年以降

震災発生から1年が経過すると、ボランティアへのニーズは復旧から復興に主眼を置いたフェーズへと変化していった。こうした状況の中、STARTではより積極的にスタディツアーを企画・運営した。また、新年度に入り、メンバーもいくらか入れ替わった。Saki-ponのプロジェクトリーダーであったCさんをはじめ、就職したメンバーは仕事との両立が難しくなり、STARTの活動への関わりが大幅に減った。結果として、山形で活動を続けるメンバーは5人に減少した。その一方で、山形大学の新生が4人メンバーに加わった。震災発生から1年あまり経ち、復興ボランティアに興味を持つ学生が少なからずいたようだった。

### (1) 新たなスタディツアーの企画

2012年4月、STARTは青山学院大学の学生とともに石巻で合同合宿を行い、実際に現地を歩きながら、以降のスタディツアーのコンセプトと内容を具体的に話し合った。その結果、ツアーの対象者を「中高生」、「大学生」、「社会人」と3つのカテゴリに分け、それぞれに合った内容のスタディツアーを開催することにした。例えば、「中学生」を対象にしたツアーでは被災した小学校を、「社会人」を対象にしたツアーでは被災地の行政機関や企業をそれぞれ訪問し、各々の被災後の対応などを学ぶという内容である。また、前年度に引き続き平成24年(2012年)度の「やまがた元気プロジェクト」にも採択され、上限を100万円とする助成金を得られたことはスタディ

ツアーの実行の大きな支えとなった。新年度に入ると、STARTのメンバーはまず山形において中学校の教員にツアーへのニーズについてのヒアリングを行い、また東京では青山学院大学の学生を中心に経団連の元会長に向けてツアーの営業活動を行った。

2012年度のツアーは5月4日のものを皮切りに、以下の表2の通り、合計9回開催することができた。回を重ねるにつれて、それまでの課題と反省を踏まえ、変更した点がいくつかある。まず、「まちあるき」はツアーから外すことにした。語り部の話が聞き取りにくい、時間の調整が難しいという、モニターツアーの頃からの課題を克服できなかったからである。そのかわり、室内に場所を限定して語り部の話をじっくり聞くことにした。また、石巻の被災状況について学ぶ事前／事後学習会を開くことで、参加者により深く学んでもらえるよう工夫した。こうした試行錯誤が功を奏したのか、アンケートによる参加者の満足度は回を追うごとに高くなっていった。また、STARATが石巻に通い続けることで、その活動に共感して語り部をしてくれる現地の人も増えていき、ツアーは着実に軌道に乗っていった。

表2 2012年度に実施したスタディツアー一覧

日付	ツアー名	対象	参加人数
2012/5/4	東北大向けスタディツアー <sup>(5)</sup>	大学生	23名
6/30	教員向けスタディツアー	中高学校の教員	16名
8/19	山形大学・立命館大学交流事業 プログラムツアー	山形大学、立命館大学、 東北芸術工科大学、京都 芸術工科大学の学生	37名
8/22	青山学院大学ツアー	青山学院大学の学生	21名
8/29			22名
9/15	防災研修※石巻専修大学某ゼミとの共催	大学生、社会人	19名
10/27	Y中スタディツアー	中学生有志とその保護者	17名
2013/1/18	大学生向けスタディツアー	山形の大学生	18名
3/16	社会人向けスタディツアー	社会人	19名



写真3 被災した門脇小学校の前で語り部の話を聞くスタディツアーの参加者たち

## (2) 新メンバーの加入

前述のように、STARTには新年度から4人のメンバーが加入した。STARTの活動にあたっては、業務内容のみならず、石巻についての知識と情報を身につけなければならない。そこで6月2日の初訪問を皮切りに、新メンバーは幾度も石巻を訪れ、現地の人たちとの交流を通して、お互いの認識を深めていった。そうした訪問を重ねるにつれ、メンバーたちは、「山形からまた来てくれたのね」といった現地の人の言葉が活動の励みになっていたという。新メンバーの1人は、石巻の訪問をした後に以下のような発言をしていた。

(語り部の) D氏は、「ボランティアは1回きりの出会いになる場合が多いので、特別にその名前を覚えようする気はなかったが、STARTは継続して支援してくれているから、メンバーの名前を覚えるようになった」と言っていた。そんなD氏が、石巻に通っているうちに僕の名前を覚えてくれていたのが嬉しかった。

新メンバーに限らず、学生たちは現地の人々との交流に喜びを見出していった。そこでは「被災者と支援者」ではなく、人と人との関係性が構築されつつあると感じられるようになっていた。こうした信頼性の醸成は支援を継続してゆくにあたって不可欠な要素である。



写真4 山形大学内の一室でミーティングをするSTARTのメンバーたち

新メンバーの加入から半年あまり経った12月、いよいよ彼／彼女らが中心となって企画したスタディツアーを行うことになった。これは山形の大学生を対象としたツアーで、参加者も集まり、準備は着々と進んでいた。しかしながら、ツアー前々日の12月7日に最大震度5弱、マグニチュード7.3の比較的大きな余震が発生し、石巻では50センチの津波が観測された。議論の結果、安全面を最優先するという原則から、ツアーは延期とした。こうした不測の事態もあったが、結局ツアーは翌年1月にあらためて実施することができた。新メンバーは大きな経験と自信を得ただけでなく、このツアーの参加者から2名が新たにSTARTに加入するという「収穫」もあった。

### (3) 活動の振り返り

立ち上げから1年が経った2012年10月、STARTのメンバーはこれまでの活動の振り返りと、新たな指針の策定に向けた議論を行った。この頃はすでに山形大のH教授、青山学院大学のT教授、それにコンサルタントのR氏からの直接的な助言等がなくても、メンバーで活動を進められるようになっていた。しかし一方では、刻々と移り変わる被災地の状況と復興ニーズに即した活動方針を改めて考える必要もあった。またメンバー数名で阪神淡路大震災の被災地を視察したことも、STARTの活動を見直す上での大きなきっかけとなっていた。

議論ではまず、神戸での見聞をもとに以下の発言があった。

神戸では地元の人どうしのコミュニティ（のつながり）が強く、それが復興に大きく影響していた。そういう意味で、石巻はまだそういったコミュニティが希薄だと思う。被災地のコミュニティが復興を促進させるので、スタディツアーでもコミュニティをつくる取り組みをしたい。

また他のメンバーからは次のような問題提起があった。

そもそもスタディツアーは、石巻における交流人口を増やす目的で行われたはずだが、商店街の人からは「人が来ただけじゃあねえ・・・」と言われた。

それに対して、以下のような考えが提案された。

スタディツアーは今のところ、石巻の直接的な支援にはなっていないかもしれない。けれど、スタディツアーで石巻を訪れた人々は石巻を楽しんでくれている。石巻や現地の人々とつながってもらうことを目的にしたスタディツアーでもいいのではないか。山形からの参加者を例に挙げると、「(隣県である)被災地の様子を知りたい」、「1日あれば被災地に行ける」という人たちもいる。

以上のような話し合いの結果、KさんはSTARTが提供できるものを「人」、「お金」、「縁」の三つにとりまとめた。「人」とはすなわち交流人口であり、現地での消費人口を増加させること、「お金」はツアー参加者が現地で消費し、またSTARTからは語り部へ謝礼を払うこと、「縁」は石巻とそこに住む人を身近に感じて継続的に応援してくれるファンを増やすこと、をそれぞれ意味している。また、STARTの結成当初は経済支援という名目のもとに一方的に被災者／被災地に貢献することを考えていたが、活動開始から1年が経ち、活動をしているメンバー自身も支援を続けながら成長するという双方向の支援をしようという新たな指針も定められた。

#### (4) Saki-ponプロジェクトの展開

Saki-ponプロジェクトは、2012年4月から住まいを東京に移したCさんを中心に、青山学院大学ボランティアセンターの学生たちの協力も得ながら進められていた。Cさんは4月初旬にワークショップを開催して、Saki-ponの制作方法を学生たちに教えた。前述の通り、Saki-ponはH教授の人脈を通して仙台メディアテーク内のミュージアムショップで販売されることが決まっていた。納品日は5月4日で、当初は100個を予定していた。しかし、そのころはまだに生産体制が築くことができなかつたので、結局納品できたのはCさんが1人で作成した20個のみであった。前述の通り、Saki-ponについては当初から否定的な声が聞かれていたが、なんと納品分は瞬く間に完売した。店側からは「早く納品してほしい」、「800円や1000円にしても売れると思う」との連絡があった。

その年の6月にはNHK教育テレビ『東北発☆未来塾』にSaki-ponプロジェクトが取り上げられ、メンバーが出演した。番組の収録と放送をきっかけに、石巻の仮設住宅でもSaki-ponの生産を引き受けてくれることになり、また番組の視聴者からホームページを作成してくれる旨の連絡が入った。さらに、下記の表3に記した通り、渋谷ヒカリエやPARCOなど、いくつかの場所でSaki-ponの販売ブースを設置してもらうことができ、流通の経路が大きく拡大した。

表3 2012年度の「Saki-pon」出店一覧

日付	出展履歴
2012/5/31	東京の中高一貫校でのバザー※青山学院大学の学生の出身校
8/20～28	渋谷ヒカリエ
9/14～30	仙台PARCO
9/15～17	お台場パナソニックセンター
2013/2～14	宇都宮PARCO
2/11	東北大学での『東北発☆未来塾』公開収録
3/10～11	東京ミッドタウンアトリウム

その後は、Cさんの本業の多忙さや、青山学院大学ボランティアステーション側の事情から、順調とはいえない時期もあったが、Saki-ponプロジェクトは総じて継続的に進められている。2013年10月には、主に女性メンバーを中心に、Saki-ponのアレンジ商品としてコサージュ、イヤリング、ネックレスを考案し、男性メンバーが動画とポスターでそれを宣伝して、山形大学の学園祭で販売した。大は1000円、小は800円という、大学生には少々高めの値段設定であったが、予想を上回り、計31個を売り上げた。さらにその年の10月末、Cさんは仕事の合間を縫って、ファッションデザイナーが主催する、蝶ネクタイ作製のワークショップに参加した。そこでCさんは石巻の反物を持ち込んで蝶ネクタイを作ってみたところ、なかなかのきばえだと好評を得た。これをきっかけに、ファッション業界とも協力して、反物をもとにした新たな商品の企画が検討されるようになった。

### 3. さらなるフェーズ変化—震災発生から2年以降

震災の発生から2年が経過した石巻では、商店街でも店舗の修繕や新築が進んで商売を再開する店も増え、次第に本格的な復興の兆しを見せはじめていた。その一方、STARTはメンバーの入れ替わりや今後の方向性の模索を迫られ、大きな岐路に立ち始めていた。

#### (1) メンバーの入れ替わり

STARTではメンバーが大きく入れ替わり、変化の局面を迎えていた。H教授は、2012年9月に山形大学を退職したことにともなって、顧問からはすでに退いていた。そのあと、2013年4月に同大学に着任したJ講師がSTARTの活動に賛同して、新たな顧問に就いてくれた。STARTを立ち上げたKさんは山形大学を修了し、NPO法人の職員となった。会計を担当していたメンバーも東京の企業に就職し、菊池も東北大学の大学院に入学して山形を離れた。さらに立ち上げ時からのメンバー2人も、学業と就活により多くの時間を費やすようになり、STARTでの活動が難しくなった。一方、新2年生のメンバー8人のうち、3人は米沢市にキャンパスがある工学部の学生であるために、市内で行われる活動にはなかなか参加できずにいた。すなわちこの年度から、実質的には、立ち上げ時からのメンバーなしの5人でSTARTを運営していかなければならなくなったのである。とりわけ新しい代表の決定が難航していたために組織の体制が定まらず、相互の連携が円滑になされていなかった。新入生を勧誘するためのチラシは作ったものの、結局それを配布する機会を逸してしまうなど、ちぐはぐな状態が続いた。

こうした状況を受け、メンバーはSTARTの今後を話し合うべく、ミーティングの場を設けた。そこではSTARTを解散するという意見さえも出されたが、最終的には「先輩たちが培ってきた石巻との縁を自分たちでなくしてしまうのはよくない」との結論に行き着き、活動を継続してゆくことになった。そしてようやく5月中旬に新たな代表が決まり、新体制が固まったのだった。

#### (2) 新メンバーたちの困難

こうして新たな体制で活動を開始したSTARTだったが、引き続き数多くの困難に直面することになった。5月に山形市内の中学生140名が参加するスタディツアーを企画したが、その大人数に新たなメンバーだけで対応するのは難しいことが分かり、結局は企画の途中から他の非営利団体の協力を仰いで共催というかたちをとらざるをえなくなった。メンバーたちによれば、この出来事によってSTARTにおける自分たちの限界を思い知らされたという。その後、7月にも山形大学の新入生を対象としたツアーを企画したが、広報不足の影響か、参加者はわずか7名にとどまった。このツアーは新たなメンバーの勧誘も目的の一つとしていたが、ツアー直後にSTARTに入る学生はいなかった<sup>(6)</sup>。さらに、山形大学による平成25年（2013年）度の『元気プロジェクト』にも落選してしまい、活動資金のめどが立たなくなったために、以降の活動は規模を縮小せざるをえなくなってしまった<sup>(7)</sup>。

夏期休暇期間に入ると、何人かのメンバーは海外に渡航したり、インターンに参加したりして、STARTの活動に関わることができる人数はさらに減少した。毎週行っていたミーティングには人が集まらず、夏休み期間中にはスタディツアー等の企画は一切行うことができなかった。夏休み明けの10月には、STARTの発起人であるKさんが大分県のNPO活動に参加することが決まった。これまでKさんは常にSTARTの中心にいて精力的に活動を進め、また大学院修了後も山形に在住していたために折に触れてメンバーにアドバイスをしていた。しかし、今後STARTはKさんなしで、しかも2年生が主体となって活動してゆかねばならなくなったのである。

### (3) 新たな方向性の模索

こうしたなか、11月9日と10日の2日間の日程で、新顧問であるJ講師の出身校・関西大学の教員1人と学生3人を招いて石巻・大川・雄勝・女川へのスタディツアーを開催した。J講師もこのときが初めてのツアー参加であった。参加した教員からは、「おかげさまで本当に意義深い体験をさせていただきました。今後もどのように支援したらよいか考えておきます」など、おおむね好意的な評価を受けることができた。しかし、メンバー内では今後の活動についての迷いが生じていた。このツアーの5日後にウェブ上で話し合いが持たれ、2年生のメンバーから以下のような発言があった。

今までのSTARTの活動は先輩たちが続けて来たことで、自分たちはそれを受け継いだけで、どうしてもやらされている感じが拭えなかった。自分でやりたいと思ったことをする方がモチベーションが上がる。石巻に行くのは楽しいけれど、山形にいるからには、山形から支援している意味をもう少し考えたい。山形に避難している子どもたちやお母さんへの支援や、防災の知識をもっと山形の人々に向けて啓蒙する機会を多く設けるべきではないのか。

こうした発言があったことで、メンバー内の合意が取れず、予定していた新たな助成金の申請は見送ることになった。メンバーたちの様子を受けて、J講師は11月20日のミーティングで次のように発言した。

こないだのツアー、そこまで期待してへんかったけど、思ったよりもずっとよくて驚いた。でもこれは先輩たちの築いてきた財産でやったもんや。君たちの準備を見てたけど、あんまり統率が取れてへん感じやったな。今度みんなで話してみた方がええよ。

J講師はツアー自体を評価しながらも、現在のメンバーにはさらなるチームワークの向上と新たな活動の提案を示唆したのである。

このJ講師の声に応じるかたちで、STARTのメンバーは11月24日に話し合いの場を設けた。そこで各メンバーたちは、普段のミーティングでは切り出せないような、率直な心中を吐露した。

「先輩達が活動にあまり関われなくなり、これまでのようにスタディツアーを大規模でやるのは難しい」、「風化が進んでいる今だからこそ、スタディツアーを続けていきたい」、「石巻で支援活動するより、今は山形で地域活性化に関する活動に集中したい」、「STARTのメンバーが好きなので、これまでのように活動を続けたい」等である。また、その最中にメンバーの1人が話し合いに真面目に参加しようとしないう他のメンバーを叱責し、今後はSTARTの活動から距離をおく旨を宣言するなど、議論は紛糾した。結局のところ、この日の話し合いではSTARTの活動を継続することを確認し、次回のミーティングで現在のSTARTの活動に関しての問題点を挙げることにした。

このように2013年12月現在においては、メンバーのほとんどが支援活動を続けたいという気持ちは持っているものの、積極的にリーダーシップを取ろうとする者はおらず、ミーティングも立ち行かなくなってきている。設立から2年が経過したSTARTは今後の方向性を模索する岐路に立っている。

#### 4. 考察

これまでSTARTの発足から今日に至るまでの状況を時系列的に記述してきた。ここでは、約2年半にわたって活動してきたSTARTの特徴をまとめ、遠隔地からの支援の課題と可能性について考察したい。

STARTの最大の特徴は、これまでの記述からも明らかな通り、遠隔地からの支援を行ってきたという点にある。ただし、遠隔地と言っても、STARTが拠点を置いた山形市は、主たる活動場所とした石巻までは車で2時間程度、一日で往復できる距離にあり、厳密には「中距離」遠隔地と言える。首都圏や関西など、より遠方地域を拠点とする団体も存在するが、その場合は長期休暇を利用するか、現地に住み込みでもしなければ、頻繁に被災地を訪れて活動するのは困難だろう。その点から言うと、STARTは週末を利用した活動や、たび重なる現地訪問を繰り返して、被災地の人々と密な連携と信頼関係を築くことができた。これは、第二の特徴、すなわちメンバーたちが多くの点で自身の日常生活を維持したまま、定期的な支援活動を続けることができるというメリットを生んだ。STARTのメンバーは大半が大学生であり、その他にも社会人となった元メンバーや大学教員も日に影に活動を支えていた。彼／彼女らが学業や仕事という日常生活を完全には中断させることなく、支援を継続できたのは、この距離の近さ、すなわちSTARTが「中距離」遠隔地に拠点を置いたところが大きい。被災地支援にたずさわりたいが、そうした日常をいわば犠牲にするのはためられるというハードルがあるとすれば、これはクリアできたことになろう。

ただし、学生主体のメンバー構成には同時に困難も伴った。それはすなわち、メンバーの入れ替わりである。大学生の部活動やサークル活動にはメンバーの入れ替わりは不可避であるが、毎年ほぼ同じ活動内容を繰り返す場合であれば、引き継ぎ等をきっちりとしておくことで代替わりの混乱は最小限に抑えられる。しかし、被災地の支援はそうはいかない。被災地では、時間とともに刻々とフェーズが移っていくからだ。よって被災地の支援は必然的にそのフェーズ変化に即

した対応を迫られる。STARTでもそうしたフェーズ変化を意識してはいたが、新メンバーが主体となった3年目は連携不足が目立ち、活動の停滞を招いてしまった。また事例部分の終盤で記した通り、今後の方針をめぐってはメンバーたち自身が模索している現状にあり、被災地のフェーズ変化とメンバーの入れ替わりは活動の継続に困難を突きつける。

時間の経過に伴うこうした局面の変化は、遠隔地からの支援という、当初は利点であった団体の特徴にも課題をもたらす。震災の発生から時間が経つにつれて、被災地ではハード面の復興が本格化するため、遠隔地からの支援への需要は相対的に低くなっていくからだ。これは冒頭で挙げた管（2002、2008a、2008b）や天野と中村（2012）が指摘した、災害ボランティアあるいは遠隔地支援が直面する課題とも共通する。しかも、活動の開始から2年が経過したSTARTにおいては、それらがさらにはっきりとしたかたちで現れることになっている。2013年度の助成金申請の不採択はSTARTの活動を大きく挫くことになったが、震災発生から2年間は採択されたこの助成が3年目に採択されなかったのは、こうしたニーズの低下を受けてのことだったかもしれない（もちろん不採択の正式な理由は断定できないが）。

先に記した通り、結成から2年が経過したSTARTは、現在その存続も含めて大きな岐路に立っている。ただし、石巻に限っても2013年11月現在で1万5000人以上の人がいまだ仮設住宅に暮らしており、さらに風化に抗するという意味においても、遠隔地からの活動の必要性は失われてはいないだろう。実際に上に記した通り、2013年11月のバスツアーは好評であったし、Saki-ponの売上げも一定数を確保している。よって今後は、そうしたニーズの低下（と見なされかねない状況）を克服しうる、活動の意義のアピールが課題になると考えられる。

### おわりに

あらためて言うまでもないことであるが、自然災害は今後も起こりうる。ソフト・ハード両面の整備や事前の対策等によって被害を最小限に食い止めることはできるだろうし、そうしなければならぬだろう。ただし、直近の例ではフィリピンの台風被害からも明らかな通り、自然の力は往々にしてわれわれの予想を超え、そしてそこには支援の必要性が顕在する。もちろん支援にはさまざまなかたちがあり、多くの人にとっては自分のできる範囲でできることをするというのが現実的であろう。

本稿では遠隔地からの支援の実情およびその利点と問題点を明らかにしてきた。山形市に拠点を置いたボランティア団体STARTは大学生のメンバーで構成され、その主な活動として石巻へのスタディツアーと復興グッズの企画・製造・販売を行った。これはまさに、遠隔地から「でも」できる支援の一つのありかたであろう。ただし、学生のメンバーが日常に身を置きながら自身のできる支援をするというこの遠隔地支援のメリットは、上で整理した通り、フェーズ対応や活動維持の難しさという問題の裏返しでもある。これは同時に、細々とではあれ現地の人々との関係を保ち、活動を継続してゆくという点こそがまさに、遠隔地支援の課題であるとともに、可能性でもあるということだ。

いかなる意味においても東日本大震災ははまだ終わってはいませんが、われわれは風化にも抗ってゆかねばならない。その意味において、遠隔地から／でもできることは依然あるはずだし、それは将来起こりうる災害においても同様であろう。

## 注

- (1) スマイルエンジンに関する詳細は『はくらのスマイルエンジン』（山形大学出版会2009）を参照のこと。
- (2) この「やまがた元気プロジェクト」とは、山形および東北を元気にするプランに対して助成を行うもので、山形大学の学生であれば誰でも応募できる。毎年5件程度が採択されている。
- (3) なお、スマイルエンジンは大型バス運行の活動を2013年1月で終了させ、2013年12月現在では「スマイルエンジンプラス」に団体名を変えて、小規模の人数で災害ボランティア活動を継続させている。
- (4) ただし、T教授は11月3・4日のワークショップには都合がつかず、11月22日に石巻を訪れた。
- (5) このスタディツアーの詳細については、川口・関・伊藤（2013）を参照。
- (6) しかし同年の10月には、このときのツアー参加者の2人がSTARTに加わった。またこの他に、10月にはSTARTに興味を持った山形大学の1年生2人が新たに加入した。
- (7) この年の助成金上限は50万円で、採用団体は6団体であった。

## 【参考文献】

天野晟・中村民雄

2012「事例研究その2—遠野」『早く的確な救援のために—初動体制ガイドラインの提案』  
pp.37-58、東京：早稲田大学出版部。

稲垣文彦

2008「復興支援の展開—新潟県中越地震の現場から」菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編『シリーズ災害と社会⑤災害ボランティア論入門』pp.192-203、東京：弘文堂。

川口幸大・関美菜子・伊藤照手

2013「東日本大震災に関連したフィールドワークを行うこと／それを指導すること—『文化人類学実習』の授業を事例に」『文化人類学』78：111-126。

菅磨志保

2002「緊急支援システムと震災ボランティア」山下祐介・菅磨志保著『震災ボランティアの社会学』pp.124-139、京都：ミネルヴァ書房。

2008a『『災害ボランティア』とは』菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編『災害ボランティア入門』pp.60-67、東京：弘文堂。

2008b「救援活動を動かす仕組み」菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編『災害ボランティア入門』pp.124-141、東京：弘文堂。

被災地のフェーズ変化に対応した遠隔地からの中長期的支援

スマイルエンジン山形

2013『ぼくらのスマイルエンジン—東日本大震災 学生ボランティアバスの記録』山形：山形大学出版会。

全国社会福祉協議会・全国ボランティア・市民活動振興センター

2013「災害ボランティアセンターで受け付けたボランティア活動者数の推移（仮集計）」  
<<http://www.saigaivc.com/ボランティア活動者数の推移/>>より、2013年10月20日取得。

中原一歩

2011『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』東京：朝日新聞出版。

兵庫県

2006「阪神・淡路大震災一般ボランティア活動者数推計」  
<<http://web.pref.hyogo.jp/wd33/documents/000036198.pdf>>より、2013年10月21日取得。

山下祐介

2002「緊急避難期の震災ボランティア状況—神戸市の概況」山下祐介・菅磨志保著『震災ボランティアの社会学』pp.20-50、京都：ミネルヴァ書房。

2008「リスクの拡大と社会の変容—現代的災害とリスク」菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編『災害ボランティア入門』pp.33-41、東京：弘文堂。

山下祐介・菅磨志保

2002『震災ボランティアの社会学』京都：ミネルヴァ書房。